フィールド上の演奏者

youhi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フィールド上の演奏者

【Ｎコード】
Ｎ３７６９Ｇ

【作者名】
ｙｏｕｈｉ

【あらすじ】
父はピアニストだった。それも、日本トップクラスのだ。そんな父の口癖はいつも同じだった「いい音色は、正確な技術と一瞬のひらめきがもたらしてくれる。私には後一歩のひらめきが足りなかった。」そういっていつも泣きそう顔をしていた。父は死の直前でも同じ事を言っていた。「音弥、世界をつかむ音色を手に入れるには、正確な技術とひらめきが大切だ。それを手に入れるためには日々のたゆまぬ努力が必要だ。私は、世界を手に入れることができなかった。音弥、お前ならできるはずだ。その歳でその音色を奏でること

ができるのだから。」これが父と交わした最後の会話だった。

プロローグ

１９８８年　夏

部屋の中は一つの音もなく、一つの気配もない。

そこには一切の音も存在も感じさせない空間が広がっていた。

いつもならグランドピアノの音が鳴り響き、母の怒声が飛び交っているこの空間も、今日ばかりはなりを潜めている。

私の父が死んだのだ。

父はピアニストだった。それも、日本トップクラスのだ。若いころにはオーストリアのウィーンというところに留学していたという。そんな父の口癖はいつも同じだった「いい音色は、正確な技術と一瞬のひらめきがもたらしてくれる。私には後一歩のひらめきが足りなかった。」そういっていつも泣きそう顔をしていた。父は死の直前でも同じ事を言っていた。「音弥、世界をつかむ音色を手に入れるには、正確な技術とひらめきが大切だ。それを手に入れるためには日々のたゆまぬ努力が必要だ。私は、世界を手に入れることができなかった。音弥、お前ならできるはずだ。その歳でその音色を奏でることができるのだから。」これが父と交わした最後の会話だった。

父の葬儀も終わりに近づき親戚の人々が私に声をかける「お父さんを超えるピアニストになりなさい」みなが同じ事を私に言う。

正直な話、私はピアノが好きではなかった。ピアノを弾き始めたのはいつごろかも覚えていない。物心付く前からピアノに触れていたのだろう。だけど、ピアノは私が選んだのではなく、他者から強制されてやっているに過ぎない。自分には才能があるのだろう。みんなが私を褒め称える。ピアノの先生もそういっている。しかし、

私にはピアノのよさが分からない。このままやめてしまいたいとも思う。しかし、運命は、どうも私にピアノを強制するようだ。父が最後に言った言葉が私の人生を決め付けてしまった。

父が亡くなって一月もすれば以前の日常に戻ってくる。以前にもまして母の指導は厳しくなった。週に3回もピアノの講師を招き、私に一日中ピアノの前にいることを強制する。「お父さんの願いをかなえるのよ」毎日同じ言葉だ。いい加減うんざりしてくる。

母が飲み物を取りに部屋から出た。この、ピアノのために造られた防音設備の整った部屋は、一気に音のない世界へとなる。私はこの時間が好きだった。この牢獄のような部屋だが、世界がまるで自分自身になったような感覚が。眼を瞑れば、世界は自分の手にあるようにさえ感じる。このまま、いなくなってしまえればなんて考えたりして…

今日、親戚の智也兄さんが今日うちに来るという。父が死んで以来はじめての休みかもしれない。今日はピアノを弾かなくてすむと思うと、ひっそりと智也兄さんに感謝した。智也兄さんは私より9歳も年上の中学生だ。サッカーの強いチームに入っているらしい。私は、自室で課題曲の楽譜を眺めていた。やることがないのだ。ピアノをやらなくて良いと喜びながらも、ほかの事を私はまったく知らなかったのだ。同年代の子が外でやるようなことを私は、まったく知らなかった。そんな風に時間を過ごしていると、部屋へ来訪者が訪れた。智也兄さんだ。

「今暇か？」

そんなことを言うもんだからつい笑ってしまった

「暇だよ。やることといえば楽譜を眺めることぐらいしかないしね」

智也兄さんは悪戯を思いついたような笑みを浮かべ

「暇なら、サッカーの練習に付き合ってくれよ。男なら、スポーツの一つでもできないとだめだぜ」

僕は答えた
「サッカーなんてやったことないけど、たぶん僕が参加しても邪魔だよ」
このときは、まだ気付けなかった智也兄さんの気遣いだなんてことは
「大丈夫。俺が教えてやるよ。」

近所のグラウンドへ行き兄さんのまねをしてサッカーボールを蹴る。この何気ない動作が僕には非常に楽しかった。いままで、なぜピアノしかやらなかったのだろうと後悔するくらいに。まだ短いが6年の人生を無駄にしてきたとさえも感じる。夢中でボールを蹴る。狙った方向に正確には飛ばないけどそれさえも楽しかった。気付けば、日は暮れていた。
「そろそろ帰るか」
まだ帰りたくなかった。また、明日からピアノ漬けの毎日が始まると思うと。だけど
「うん」
兄さんを困らせるようなことはしたくなかった。新しい世界を見せてくれた恩人だから。

兄さんは何も言わずサッカーボールを置いていてくれた。このとき初めて私は決めたのかもしれない。自分のやりたいことを。

その日から僕は夜な夜なボールを蹴りに庭に出ていた。母の寝室とはちょうど正反対の位置にあることが幸いした。私は、この夜の時間を楽しみに、毎日を過ごしていた。

第1話1989年

私は小学生になり、たいした実感もわかず日々を過ごしていた。以前と違うところは毎日学校があることだけで友達も大してできず、日々、学校と家の往復を繰り返し、夜までピアノのレッスンをし、母が寝てからサッカーをする。こんな毎日の繰り返しだ。

今日は、学校で初めての音楽の時間だ。どうやら歌の時間のようだ。先生の伴奏に合わせてみんなが歌いだす。周りの人間を見て驚愕する。同世代の人間はこの程度しかできないのかと。音程もリズムもピアノの音に合っていない。私にとってこれは歌ですらないと感じた。この瞬間、私は実感した。所詮、私は音楽家への道が正しいのだと。周りの人間がうらやましい。この先には無限の未来が広がっているのだから。私は、嫉妬しているのだろう。未来を自分自身で決めることのできる人たちに。

この日から、私は孤立した。正確に言うならば、自ら孤独を望んだのだ。母が望むようにひたすらピアノのレッスンに励んだ。サッカーのことなど忘れて。

小学校に入り、半年たったころに私は始めてピアノコンクールに出た。私の番がまわってきた。私は、課題曲を難なく演奏し舞台を後にした。周りに自分より上手に引ける人間はいない。あっけなく私はグランプリとなった。母は非常に喜んでいる。しかし、私は特に何も感じなかった。それから、コンクールでいくつもグランプリをもらった。同世代では相手になる人間がいなかった。私の技術は、大人を相手にしても引けをとらないほどに成長していたのだから。

1年生も終わりに近づき、私は大きなコンクールに出た。大人も出るような大きな大会だ。審査員の人も有名な人ばかりで海外の大

物まで来ている。私は、そこでもいつものように演奏した。しかし、評価は低かった。「君の演奏には面白みがない」「技術は高いが何も伝わってこない」誰もが技術以外の点で低評価を示しているのだ。私は、何も思わなかった。当たり前だ。本当の意味で何も考えずに弾いているのだから。

母は何を思ったのだろう。ピアノの練習を強制しなくなった。父が死んだあの日から、毎日のように繰り返してきた練習を休みにしたのだ。次の日も。また次の日も。母は気付いてしまったのだ、私がピアノを愛していないことに。

ピアノをしなくなった私には時間だけは膨大にあまっていた。やることがなく部屋で寝ていてふと思った。一年前と同じではないかと。智也兄さんが私の部屋を訪れた日と。そう思うとサッカーがしたくなった。ボールを持ち公園へ向かう。もう母にサッカーをやることを隠さなくてもいいと思うと悪く思いながらも喜びでいっぱいだ。

公園でボールを蹴っていると去年のことが思い出す。初めてボールを蹴った感触を。肌が焼けそうになるくらい熱くなる気持ちを。今日話そうと思った。母さんにサッカーをやりたいと。ピアノは自分で弾きたいと思ったときに弾かしてくれと。

夢中になってボールを蹴っていると一人の少女が来た。

「何で一人でボールを蹴ってるの？」

僕は驚いた、周りに気がいかないくらい熱中していたのだろう。

「何で？」

彼女はもう一度私に問いかけた。

「今までそうしてきたから」

僕は答えた。彼女は不思議そうな顔をして僕に問いかけた。

「サッカーは11人でやるものだよ」
そんなことは、学校の体育の教科書で知っていた。だけど、私には一緒にプレーしてくれる友達はいない。
「どうでもいいだろ。用がないなら話しかけないでくれ」
そう言って、またボールを蹴ろうとしたら彼女は
「じゃあ、私とやろう」
ひまわりのような笑顔をお振りまきながら私にそういった。

日が暮れ始めもう帰る時間が近くなったときに彼女は
「そういえば自己紹介してなったね。私は有希。君は？」
「音弥」
そういって僕はそっけなく答えた。
「音弥はサッカーうまいね。明日も私に教えてよ。」
「いいけど。」
「ありがとう」
そういって彼女は、満面の笑みをこぼして帰っていった。
その日から、毎日のように二人で遊んだ。
気付けば、2年生も終わりに近づいていた。

久しぶりに母が、私にピアノを弾いてくれないかといってきた。もうあの時以来弾いていなかった私の指は、以前のようには動いてくれなかった。だけど、すごく気持ちよく引けた気がする。

数日がたち、急に我が家があわただしくなった。海外行きが決まったといって大騒ぎしている。そのとき私には意味がわからなかった。旅行にでも行くのかなんて考えたりして。

そして、公園から帰ってきた私に母は驚愕の一言を述べた。「音弥、あなたの海外留学が決まったわ。この間の演奏をイタリアのピ

アニストに送ったら、非常に評価が高かったの。ぜひ私の元で学ばせたいといってくださったの」母はうれしそうな顔をしながら僕に言う。続けて「できるだけ早いほうがいいといっているの。だから、3年生になるころに向こうへ行ってもらうわ。」意味が分からなかった。母は私のピアノに対してあきらめていたのではなかったのか。そう考えていると頭が真っ白になった。まるで世界が終わったみたいに。

この日からまた、ピアノ漬けの毎日が始まった。公園に行くこともできず、毎日ピアノばかりしている。有希にも会っていない。毎日ピアノと向かい合い、鍵盤を引き続ける。こんな生活はいやだった。誰か救ってくれないか、そんなことばかり考えていた。

2年生も終わりイタリアへ旅立つ日が近づいてきた。レッスンを無断で休み、公園へやってきた。公園には誰もいない、静寂が広がっていた。心のどこかで有希がいることを僕は望んでいたのだろう。帰ろうとしたとき急に声が聞こえた

「音弥…」

有希は毎日待ってくれていたのだ。毎日私のことを。それからのことは良く覚えていないが、私はひたすら謝っていたのだろう。そんな記憶ばかり残っている。そして、もう公園へは来ることができないことを伝え分かれた。

第2話1991年

今私はイタリアの地を踏んでいる。空港で迎えの人が私を手招きし、早く来いといっている。カタコトの日本語を使い私に話しかけてくる。「日本はどんなところ」「曲は何がとくいだい」なんて事を話しながら下宿先に着いた。

私も片言のイタリア語で

「よろしくお願いします」

といい家へ入っていった。

ピアノを教えてくれる先生は５０歳半ばの人で、その奥さんと二人で暮らしているという。子供はいないらしく、私のことをまるで子供ができたようだと喜んで向かいいれてくれた。正直な話、日本より楽しい生活が送れそうだと心躍る心境だった。

次の日からレッスンは始まった。先生は私のピアノを聞き、悩んだ末に一言言った。

「君のピアノは気持ちがこもっていない。あの音源とはまったく違うが何か理由があるのかい」

その問いに私は答えることができなかった。

次の日先生は私に、何か好きなことはあるかい？と聞いてきた。

私は悩んだ末に

「サッカーが好き」といった。

そういうと先生は

「じゃあ、サッカーをしよう」

そういって広場へと私を連れて行った。

この国では、みんながサッカーを愛している。広場では、老若男女が混ざってサッカーをしていた。

「こいつも入れてやってくれ」

先生が大きな声でそう言うと
「来いよ坊主」
なんて言葉が聞こえた。

家へ帰りピアノを弾いてみる。今は不思議なくらいに楽しくピアノが弾ける。先生も満足しているみたいだ。
「音弥、地元のサッカーチームに入ってみないか」
急に先生は僕に問いかけた。
「ピアノをやる時間が減るけどいいの」
僕が聞き返すと
「子供は一番好きなことをやるべきだ。このままピアノをしても上達はできないだろうし、君は技術に関しては問題ない。だから、今は好きなことをやるべきさ」
先生はさわやかな笑顔を振りまきながら私にそういった。
初めて、私を理解してくれる人間に出会えた。この日私はそう実感した。

「今日から私達のチームに入ることになったウエハラ　オトヤだ。みんな仲良くしてやってくれ」チームの監督がみんなに告げた。
私は片言のイタリア語で
「よろしくお願いします」
そういうとみんなは、「どこから来たの」だの「ポジションはどこ希望」だの聞いてきた。しかし、私は、うまく言葉が分からずうろたえるばかりだった。
みんなとグラウンドの上を駆ける。思い返せばこれが初めてだったのかもしれない。１１対１１のサッカーをするのは。始めてのサッカーは想像以上に気持ちよく、楽しいものだった。

イタリアに着てから3年が経った。ピアノは時折弾く程度で毎日サッカーばかりしてきた。先生は私のピアノは以前と比べると非常

に良いものになったといってくれる。サッカーでは、プロチームの下部組織から何度かスカウトが来た。どうやら、一人でサッカーをしてきたせいか、私の個人技は目を見張るものが合ったらしい。しかし、私は断るしかなかった。プロチームの下部となれば、この地を離れる必要があるからだ。先生にはお世話になっているし、母にはピアノを学ぶために留学をしているといっている。そんな私がいけるわけがなかったのだ。

毎日が充実していた。しかし、急に終わりは訪れた。先生が倒れて入院したのだ。そのため、私は日本へ帰国することになった。楽しかった毎日が終わりを告げ、苦しかった毎日がまた来るのかと思うと、憂鬱な気分になってくる。

幸い、先生は大きな病気ではないけれど、これからのことを考えると私の面倒を見るのは大変だという結論に落ち着いた。この瞬間私の帰国が決定したのだ。

第3話１９９６年

中学生となるこの瞬間に、私は喜びにあふれていた。母がサッカーをやることを許してくれたのだ。先生の説得により、私はサッカーをやることが許されたのだ。

入学式も終わり早速部室に向かう。部室へ向かう途中
「あれ、君もサッカー部にはいるの」
急にそんな声がした。振り返ると
「俺、日生光宏。サッカー部に入るんだけど君もだろ」
そこで私はそっけなく
「ああ」
そういうと、日生は
「よろしく名前教えてよ」
そういいながら握手を求めてきた。
「上原音弥だ。よろしく」
そういいながら握手した。

どうやら、この江戸川二中のサッカー部は精力的な活動は行なっていないようだ。所詮は部活動レベルのサッカーだ。だけど、私はサッカーができればそれでよかった。
光宏とはすぐに仲良くなった。あのサッカー選手が好きだとか、今度のワールドカップは日本は出場できるのかなんかを話したりして。
光宏は、サッカーもうまかった。二人でこのチームを強くしてやろうなんていいあって。

部活に入ってはじめての試合が今週末行なわれる。中学生になって初めての試合だ。私は４－４－２のシステムのＦＷを任せられる

ようだ。光宏は右ＭＦだ。試合に向けて練習が行なわれる。先輩達は役に立たないと思い、二人で作戦を練っていく。相手の桜上水中は万年予選落ちの弱小チームらしい。江戸川二中もそう変わったものではないが。

ついに試合当日となった。結果を見れば４－４という点の取り合いになった。相手チームのＭＦとＦＷがうまく、ＤＦ陣が切り裂かれた。お互い同じようなパターンで全てが決まっていた。江戸川二中は俺と光宏。桜上水中はＭＦの一人とＦＷの一人。どちらのチームも二人の連携での得点しかなかった。いつからサッカーは２対２になったのだろう。そんな馬鹿なことを考えながら家へ帰ることとした。

試合から数日たち練習前に光宏が転校することを私に言った。
「俺、来月から東北のほうへ転校することになった」
俺は
「そうか。さみしくなるな」
そっと一言告げた。

それから会話もなく練習が終わり光宏は
「今日面白いやつを見つけたんだ」
急に何を言うかと思うと
「すげえ足が速いんだぜそいつ」
笑いながら私に言った。
「小岩鉄平っていうんだけどたぶんサッカー部に入るぜ」
俺は
「そいつは使えるのか」
そう聞くと
「使う人間しだいかな」
笑いながら言った。

光宏が転校するその日光宏は俺に言った
「なぁ、本気で一度勝負してくれないか」
俺は
「いいよ。一度だけなら」
そういってグランドへ向かった。

光宏が先攻でボールを持つ
右足で一度ボールをまたぎ左へ抜けてくる。得意のすばやい動きで俺の右側を抜けようとしてくる。だが、この程度向こうでたくさん相手にした。体を寄せてボールをとろうとする。自慢の足で振り切ろうとしてくる。しかし、手で押さえつけスピードに乗らせない。そして、なんなくボールを奪った。
次は、俺の番だ。ボールを持った瞬間加速する。右足で右へ抜ける動作をする。そうすると光宏の左足が伸びてきた。そこで、開いた股を抜くためにエラシコを行い、股を抜いて光宏を抜き去った。エラシコとは、南米の選手が良く使う技だ。

「エラシコかよ。すげーな」
そういう光宏の顔は喜んでいた。
「まぁな」
そういって得意げな顔をした。
「次ぎ会うときは負けないからな」
そういって光宏とは別れた。

久しぶりにピアノを弾いた。今日は、落ち着いた曲を弾いた。今迄で一番うまく弾けたように感じる。あんなに嫌っていたピアノも今では無心に弾ける。これが、感情をこめるということなのだろうと今日は実感できた。

次の日、サッカー部に入部希望者が来た。光宏が言っていた男だ。
「小岩　鉄平。走ることは誰にも負けない。ところでみっくんはどこだ」
大声で自己紹介をして騒いでいる。正直うるさいやつが来たなんて頭を抱えた。

小岩は、サッカーはまったくの初心者だった。
それから毎日、小岩と練習した。才能はあるのだろう。足元はおぼつかないが、他の一年生より使えると俺は感じた。先輩も合わせてみんな一様なプレーばかりをするこの日本サッカーにおいて小岩のような選手は非常に魅力的に感じた。日本のサッカープレーヤーはみんな、個人技よりパスを選択する場合が多い。足元の技術は高くとも、相手を無理に抜こうとはせずにパスを選択する。そして、パスを主体とした組織サッカーを目指す。一気に裏へ抜けるパス。エリア外での意表をついたミドルシュート。スピードに乗ったサイドアタック。今述べたようなことはめったにない。基本的に遅攻が主体だ。中盤でゆっくりパスをまわして堅実なところへパスを出す。確かにカウンターをくらう心配もないし、点が入らないわけではない。だけど、私は、そんなサッカーに何の魅力も感じない。もっとクリエイティブで観客が沸くようなサッカーがしたいのだ。だからこそ、小岩のような一芸に秀でた選手は私にとっては魅力的なのだ。

第４話１９９７年　春

中学に入って一年が過ぎた。大会には一年ということで出してもらえなかった。しかし、二年生になったときに私はレギュラーに選ばれた。本来のポジションであるＯＭＦとして。小岩もＦＷでレギュラーとなった。二年になって春にはすぐ大会が待っている。そのため、毎日練習に明け暮れた。

春季大会が始まった。組み合わせもよく近くには強豪チームはいなかった。小岩のデビュー戦となった。試合前に、小岩が胸を押さえて眼を瞑っている。

「大丈夫か」

声をかけると

「大丈夫だ」

いつもの元気はなく緊張した面持ちで答えた。

「俺達のコンビネーションで試合を沸かせてやろうぜ」

そういうと小岩は

「おう」

と元気よく声を出した。

試合が開始される。相手は上小松中だ

試合開始とともにボールは俺の元へ送られた。小岩はゴール前へ一気に走っている。俺に向かってよってくる相手ＦＷを抜き去り、中盤から一気に相手ゴールへシュートを放つ。ボールに回転はかかっておらず不規則に曲がって落ちた。キーパーが反応するがボールをはじいてしまう。そこに走りこんでいた小岩が詰める。開始１分の先制だった。会場が驚きに包まれた。試合は、そのまま大量の追加点を重ねた江戸川二中が８－０という快勝を収めた。周りは喜びに満ちている。だけど、俺は満足できなかった。お前らは何だ。ま

ともにサッカーする気があるのか。この程度の相手に何度失点しそうになった。０点ですんでいるのはたまたまじゃないのか。

楽しそうにしている小岩に俺は言った

「試合どうだった」

そういうと小岩は

「最高だな」

そういって満面の笑みを浮かべた。

小岩の笑みとは裏腹に俺の気持ちは冷めたものだった。

そのあと春季大会を勝ち抜いていった。しかし、ついに強豪といわれるチームと当たった。明星中だ。このチームは武蔵野森と毎回全国出場を駆けて争うチームだ。東京の２強といってもいい。

試合前日、作戦をチームで練ることにした。

「相手のＦＷが強いらしいぜ」

「ＤＦを増やしてカウンター狙いで行こう」

「鉄平と上原の二人を前線に残しておこう」

「お前らなら点を取れるだろ」

そういって俺と小岩に問いかける

小岩は

「任せろ」

元気よく答えるが俺は

「ああ」

そういって気持ちがますます冷めていった

その結果、基本は俺と小岩の二人で攻めて、残りで守りを固めカウンター狙いとなった。お前らで守りきれるのか。そんなことお思いつつも口には出さず帰路に着いた。

試合開始のホイッスルとともに早速相手に攻められた。相手ＦＷ

の鳴海の高さに誰も対抗できず開始5分も立たないうちに点数を決められた。チームのメンバーは完全に浮き足立っていた。続けざまに2点、3点と決められた。俺の頭の中ではやっぱりお前らじゃ無理だったな。なんてことばかり考えてた。

ようやく前半が終わった。ベンチへ帰る途中に相手の声が聞こえた

「今日の試合は楽勝だな」

「ああ。ココまで勝ち残ってるのが不思議なくらいだな」

そんな風に馬鹿にした会話が聞こえる。

ふざけるな。俺をこいつらと一緒にするな。

俺の中で我慢の限界だった。

早くもチーム内ではあきらめのムードが漂っている。まだ元気なのは小岩くらいだ。小岩をこっちへ呼び寄せる

「他のやつは、もうあきらめていて役に立たない。俺が前線までボールを持っていく。お前は裏へ抜ける動きとこぼれ球を狙ってくれ」

そう言うと

「任せろ。この試合勝つぞ」

こいつだけは頼りになると感じながらキックオフとともにボールを持つ。周りからパスを出せと声が聞こえる。お前らなんかに出すか、そう思いながら、いきなり仕掛ける。相手のＦＷをワンフェイントで抜き去り相手ＭＦが詰めてくる。その瞬間、世界から音が消えた。敵の動きが手に取るように分かる。相手が足を出してきた瞬間ボールを引いてルーレートを行い、相手を置き去りにした。シュートコースが開いた。しかし、小岩がゴール前でフリーになっているのを感じた。シュートフェイントを掛け小岩にスルーパスを出した。後はゴールに蹴りこむだけだった。ようやく点数が入り３－１となった。喜んでいる小岩が駆け寄ってくる。だが、俺はこの感覚が何なのかを考えていた。これが幼いころ父が言っていた世界を手に入れる感覚ではないかと考えていた。ピアノとサッカー、分野は違えどたどり着くところは同じではないのか。ふと、そんな気がし

た。
試合はこの後小岩とのコンビネーションで1点を返すが、それが精一杯だった。結果3－2という結果に終わった。周りは善戦できたと喜んでいる。しかし、今の俺にはそんな周りがバカらしく感じられた。

第5話1997年　夏

試合から3ヶ月が過ぎ練習試合の申し込みが来た。秋季大会のトーナメントに対する調整試合のようなものだ。相手は一年のころに戦った桜上水中だ。そのときは光宏と一緒に出て引き分けた相手だ。うわさによると春の新人戦では武蔵野森中相手に善戦したらしい。そう聞くと江戸川二中より強いように感じる。不思議なものだ。周りは気楽なもので、ぬるい雰囲気で練習をしている。小岩と俺のみが真剣に練習している。この環境に非常にいらだつ。少し前まではサッカーをできるだけでよかったのに今では試合で勝ちたいと思っている。そう思うとこのサッカー部に対する気持ちがますます冷めたものへとなっていった。

練習試合の日が来た。向こうは4－4－2のフォーメーションを引いているメンバーが1年と2年しかいないのは気になったが以前と変わらないような気がする。そう思い試合を始めた。

一方的だ。そう思いまわりを見渡す。前半始まって10分しか経っていないのにすでに3－0となっている。原因は分かっている。完全になめていたのだ。明星中と善戦して調子に乗っていたのだ。回りの動きが悪い。まともに動いている人間が小岩以外にいない。この試合も、俺は周りに見切りをつけることを決めた。小岩を呼ぶ。

「他の人間は使えない。だから、今回もお前は裏へ抜ける動きとこぼれ球を狙ってくれ。相手のバックラインは意外ともろそうだしな」

そういうと小岩は

「任せろ。点を決めるのは俺の仕事だぜ」

そういって、元気よく駆け出した。

相手の金髪のFWからファールすれすれのあたりで無理やりボールを奪う。まだ自軍の危険なゾーンだがパスの選択肢はない。周り

から怒声が聞こえる。黙れ。心の中でそう思いながらドリブルを開始する。相手のＭＦが体を寄せてくる。しかし、加速して置き去りにする。もう一人寄ってきたが、スピードに乗ったフェイントを掛け抜き去る。小岩が走っている。しかし、シュートコースが開いた。右足のアウトフロントで擦り挙げるように思いっきりボールを蹴り上げた。シュートはＤＦを交わして右上隅に飛んでいる。キーパーが必死に手を伸ばすが届かない。まず１点目だ。そう思いセンターサークルにボールを持っていく。

すぐ試合は再開し、相手はウイングバックを変えてきた。この選手を使いワイドな試合展開をしてきた。ＤＦ陣はまったく対応できずすぐに追加点を取られた。これで４－１だ。こちらの追い上げムードを一気に沈めた。うまい。そう思わず思ってしまうような展開だ。だけど、俺には関係ない。そう思いすぐにリスタートする。しかし、今度は俺のマークに三人もつけてきた、パスはないと思われている。これは好都合だ。そう思い相手ひきつける。ボールをキープしながら小岩へのパスコースを探す。相手のＤＦラインは思った通り穴があり、すぐに見つかった。このスルーパスに小岩が飛び込み２点目をあげた。しばらく試合はだらだらと続いた。こちらの得点パターンが全て俺から始まっていることに気付かれたのだ。俺へのパスコースが全て消されている。相手の攻め方もサイドアタックばかりなので、ボールを奪取する機会も得られない。イライラがたまっていた。試合終了間際になりようやくボールを奪取した。これがラストチャンスだと思い一気にドリブルを仕掛けた。そのときまたあの感覚が俺を襲った。世界を手に入れる感覚が。今度は前回よりも明確に感じる。相手が二人体を寄せてくるフェイントを掛け一瞬で置き去りにする。味方は誰も付いてこられていない。相手ＤＦがパスはないため３人も寄ってくる。しかし、取られる気はまったくしなかった一人目を右足のエラシコで抜き去り二人目は左足のルーレットを使い抜き去った。三人目は股を抜いて抜き去った。後はキーパーだけだ。そう思いシュート体制に入る。俺の右後ろから小

岩が全速力で走ってきているのが分かる。このとき、脳裏に点をより確実に取る方法が浮かんだ。急遽シュートをフェイントに変えノールックで右側へボールを転がした。小岩が押し込んだところで試合は終わった。結果は４－３だ。この試合で俺は実感した。こんなチームにいても俺が腐ってしまうと。より高度なチームでやるべきだと。

試合後すぐに帰ろうとしたときふと視界の片隅に移った少女がいた。

近くにいる桜上水の９番に声を掛ける。

「あのショートヘアーの子の名前を教えてくれないか」

そう言うと

「小島さんのこと。今呼ぼうか？」

人懐っこい顔で聞いてきた

「ひとまず名前を教えてほしいんだが」

笑顔のまま

「小島　有希だけど」

彼はそう言った。十分だ。そう思い

「ありがとう」

そういって９番の元を後にした。

「すいません」

そういって俺は有希に声を掛けた

「んん」

そういって君は僕のほうへ振り向いた。あのひまわりのような笑顔のまま

「昔、江戸川のほうに住んでなかった」

そういって私は問い掛けた

「えっ、何で知ってるの」

そういって驚いた顔をした

「覚えてない？音弥って子供」
そう聞くと君は
「もしかして、音弥なの。久しぶりだね。まだサッカー続けてたんだ」
そういって君は昔と変わらない笑顔のまま微笑んだ

それからの時間は楽しかった。久しぶりの有希との会話は。
彼女は今女子サッカー部を作ったばかりらしく今がすごく楽しいらしい。
うらやましい。そう思う気持ちは隠しつつ、俺は有希に言った。
「今度どこかで遊ばないか」
そういうと彼女は
「明日は暇」
首をかしげながら聞いてくる
「ああ、暇だ」
そう答えると
「明日の９時にフットサルコートに集合」
そう言って約束をした後分かれた。

第6話1997年　夏2

もうすぐで有希と約束の時間になる。待ち合わせのフットサルコートで待っていると、４人組みの男女が近づいてきた。
「待った。音弥」
そういって彼女は近づいてきた。
「ああ」
俺は驚きで生返事をしてしまった。てっきり彼女だけが来るものだと思っていたから。
「デェートでも期待しとったんかぁ」
ニヤニヤしながら金髪の男が言ってきた。
「そこまでにしておけ、シゲ」
茶髪の男がシゲとやばれる男をとめる
「タツボンの小姑」
そんなことを言いながら近寄ってくる
そういって、たじろいでいると
小さな男が
「ひとまず自己紹介しない」
そういって、苦笑いした。

「桜上水中の水野竜也だ。よろしく」
「同じく、桜上水中の佐藤茂樹だ。シゲでええで」
「風祭将、よろしく」
「自己紹介はいらないと思うけど、小島有希よ。」
そういって桜上水中の面々は自己紹介した。俺は
「江戸川二中の上原音弥だ。有希とは昔よくサッカーした仲だ。よろしく頼む」
そういって自己紹介した。

「早速だけどやろうよ、フットサル」
そういって風祭ははしゃいでいる。俺も楽しみだった。いつものメンバーじゃないこの時間が。昨日の試合を見る限り、今いるメンバーはみんなうまいはずだ。有希に関しては分からないけど。

対戦相手も見つかり、試合を開始する。キーパーはシゲがやるようだ。
早速ボールが廻ってくる、足の裏でボールをトラップする。周りを見渡す。相手が寄せてきたのでフリーの有希にボールを預ける。有希はどうやら仕掛けるようだ。桜上水の面子はみんなボールをもらう動きをする。その結果、相手ＤＦは動きにつられてしまい、有希に抜き去られた。そのまま、シュートを放つ。シュートはゴールネットを揺らした。俺は素直に驚いた。有希はあのころより格段にうまくなっていることに。そして、何よりも楽しそうにプレーする彼女の姿に。最近の自分はどうだろう。楽しんでサッカーをやった記憶がない。練習では周囲の態度にイラつき、試合では、周りの実力不足にいらだっている。あのイタリアで過ごしたときのような気持ちは最近感じていなかった。そう思うと、無性に悲しくなってきた。

試合が終わり、結果は大勝だった。
シゲが声を掛けてくる
「じぶんうまいなぁ。なんでユースとかに選ばれてないん？そのくらいの実力があれば普通呼ばれるやろ」
そういって俺に問いかける
「最近まで、イタリアに行ってたからね。日本のサッカー事情は良くわかんないし」
そういって答えた。
「サッカー留学か。すごいなぁ」
シゲはそういって俺に擦り寄ってくる

「サッカー留学じゃないよ。一身上の都合ってやつ」
そういうとシゲは
「了解。深いことはきかないでやろう」
そういってはにかんだ
風祭と水野、それに有希が近づいてきた。
「相変わらずうまいね。昨日の試合でも思ったけど」
有希はそう言って近づいてきた
「すごいや。まるでボールが足に吸い付いてるみたいだった」
風祭ははしゃぎながら話しかけてくる。
「ああ」
そう言って水野は風祭の話に相槌を打っている
俺は桜上水の連中がうらやましかった。こいつらはみんな上を目指している。しかし、江戸川二中ではどうだ。小岩ですら、光宏を抜くことを目標としてプレーしている。だれも上を目指してはいない。なるほど。試合に負けた理由が完全に分かった瞬間だった。上を目指している人間に、現状で満足している人間達が勝てるはずがない。騒がしいフットサルコートとは裏腹に、心は冷めていくのを感じた。今日ココで理解した。俺は江戸川二中でサッカーをやってもメリットはないと。もっと上のチームでやっていこうと。そんなことを考えていると、急に声がかかった。
「音弥、やっと気付いた、何回も読んだのに無視するなんてひどくない」
そう言って有希は笑いながら怒っている
「悪い。考え事してた」
そう言って軽く謝る
「もうすぐ次の試合だよ」
風祭の呼びかけが聞こえる
「「今行く」」
そう言って俺と有希はコートへと向かった。

何試合したのかは覚えていない。覚えているのは桜上水の連中とやるサッカーは楽しかったということだ。今思い返すとこんな気持ちはいつ以来だろう、ここ久しく感じていない。
「今日はこれでおしまい」
有希の声がする。これで今日の楽しい時間も終わりだと思うと悲しくなってくる。この時間が永遠に続けばいいのに。そんなロマンチックなことを考えてしまう。実際にはありえないのに。

帰りの電車に乗るために最寄の駅へ向かう。今後会うことができないかもしれない。そう思うと悲しくなっている。そして、何より有希と話したいことがまだたくさんある。そう思い有希に電話番号を聞こうか悩んでいた。急にわき腹に小突かれる感触がした。視線をそっちに持っていくとシゲが肘で小突いていた。耳元に顔を近づけ
「小島の連絡先きかんでええんか」
シゲはニヤニヤしながら問いかけてくる。一気に耳が熱くなる
「もう電車の時間は近いで。のんびりしてたら来てまうで」
そう言って俺をからかってくる。このとき俺は冷静じゃなかったのだろう。シゲを押しのけ有希の元へ向かった。
「なぁ、今度また一緒にどこかへでかけないか」
彼女は
「いいよ」
俺に向かって微笑みながら言ってくれた
「電話番号を教えてくれないか。連絡するから」
そういうと彼女は、かばんから紙を取り出しサラサラと番号を書き込んでいく。紙を私に差し出しながら
「連絡してね、待ってるから」
同時にプラットホームに電車の到着アナウンスが流れた
「もう行くね」
そう言って電車に乗り込む彼女に向かい
「必ず連絡するから」

彼女に向かって別れを告げた。5年前とは違い、再開を約束した別れだった。

電車を降り、家路に着いた。体はフットサルにより疲労が溜まっていた。休息を求めるからだだけども、今日は無性にピアノが弾きたかった。今日はどんな音を奏でられるのかが楽しみで。

第7話1997年　夏3

秋のトーナメントが明日に控えている。桜上水のメンバーとのフットサルのあと俺は考えた。このままで本当にいいのかと。よくよく考えれば、日本に帰ってきてから何ができるようになったのだろう。考えても思い当たらない。悲しさとともに涙がこみ上げてくる。

イタリアに帰りたい。そう思う気持ちが強くこみ上げてくる。向こうは良かった。町のチームでも一人一人の意識レベルが違った。試合に向けて練習はまじめに取り組むし、試合中も考えながらプレーをする。各自自分の考えを持っていた。その中で、レギュラーをとるためにチームメイトとポジションを奪い合う感覚が己を高めていくのが実感できた。このチームでは所詮年齢がレギュラーか、そうでないかを決める。ポジションを奪い合うことがないから競争心は起きないし、レギュラーを取るためにがんばろうという気持ちが芽生えない。こんなチームにいたら腐ってしまう。この日、俺はチームからの決別を決めた。

試合当日となった。小岩には昨日の夜電話で伝えた。俺がこの大会が終わり次第サッカー部をやめるということを。試合が始まるまで、小岩は何も言ってこなかった。愛想を付かされたのかもしれない。だけど俺には後悔の気持ちはなかった。俺はこいつらとは違い上を目指しているのだから。

試合が始まった。今日の相手は、別に強くもない学校だった。だから、いつも道理俺にボールを集めて、そこからゲームを組み立てる作戦を取ろうとした。しかし、相手は、試合開始と同時に三人がかりで俺をマークに来た。よく内のチームを調べている。この展開に浮き足立ち味方は攻め手を見出せない。小岩もどこか動きが固い。俺も三人のマークを振り切れずにいた。いや、やろうと思えばできたのかもしれない。しかし、気持ちが完全に冷め切っていた。相手

は俺のマークに人数を掛けているのだ。数的優位に立てるのだから、後は他のやつらでやってくれといった気持ちだった。無常にも、時間は過ぎてゆく。後半も終わりに近づいてきたとき、急にチームの運動量が減ってきた。練習不足がたたっているのだ。それでもなんとか同点を保っていた。後半も終わりに近づき、審判が時計を見ている。この瞬間完全に江戸川二中ＤＦ陣の集中が切れた。一瞬の隙を突かれて、裏へボールを通された。その瞬間、俺はこの試合の負けを感じた。どうやら、この試合が江戸川二中最後の試合となりそうだと。

試合後、みんながわめいている。何でこんなチームに負けたのだとか。誰のせいだとか。俺はそんな言葉を耳にしながら、馬鹿な連中だと思っていた。負けたのは、お前らが練習もろくにしてないくせに相手をなめていたからだろ。そう思うとわめいている連中がこっけいに見えてきた。チームのキャプテンが俺に近づいてきて、俺に向けて文句を言う

「何でもっとボールをもらう動きをしないんだ。お前のせいで負けたじゃないか」

馬鹿馬鹿しい。無視して家へ帰ろうとする。背中越しに何か言っているのが聞こえるが無視して帰路に着いた。

次の日、暇だったので、有希と連絡を取った。

「はい、小島です」

出たのが有希の母親だった。そのため

「上原ですけど、有希さんおられますか」

そう言うと

「ちょっと待ってね」

そう言うと電話越しに保留の音楽が流れてくる

しばらく待っていると

「ごめん、待った。それで、音弥どうしたの」

有希が慌てたように電話にでた
「いや、暇だったし有希はどうしているかなと思って。ところで、これから暇だったりする。暇だったらどこか行かない」
そう言うと
「ごめん。今日は試合があるからだめなんだ。音弥は試合じゃないの」
冷静に考えれば、彼女はサッカー部に所属しているのだから当たり前だった。俺も勝っていれば今日は試合だったのだから。
「負けちゃったからね。そっか、会場違うからスケジュールも違うと思ったらそんなことないんだね。うーん。じゃあ、俺は今日暇だから、試合見に行ってもいい」
彼女は
「そっか。残念だったね。試合は洛葉中のグラウンドで１３：００からだから。待ってるから来てね」
有希はそう言って電話を切った。

電車に乗って、洛葉中まで向かう。余裕を持って出たためか、試合開始よりかなり早く着いてしまった。空は雨降りそうだ。天気予報を信じるのならばもうすぐ雨が降るらしい。
試合に向けて準備している有希を見つけた
「有希、何の準備してるの」
有希は驚いた顔をして
「音弥、もう来たの。これは、スパイク裏に着いた泥を取るための坊を準備してるの。雨が降りそうだしね」
そう言って出迎えてくれた。
「今日の相手は強いの。洛葉中なんて聞いたことないけど」
有希は
「春は武蔵野森に負けたらしいけど。それで打倒武蔵森を掲げているって話し」
「そうなんだ、じゃあ、上の下くらいの強さってこと」

そう聞くと
「そんなとこ。準備忙しいからまたね」
俺は
「ああ。俺は少し離れた場所で見とくよ。水野たちによろしく言っといて」
そう言って分かれた。

試合が始まり、両チーム一歩も譲らずせめぎ合っている。試合を見ていて思う。桜上水というチームは非常に恵まれていると。この試合ＭＦの風祭を筆頭にみんなが考えながらプレーをしている。振り出した雨に対して各自が考えたい策を立てようとしている。動きだって、各々が状況に合わせたプレーを考えている。いいチームだと思う。前回戦ったときより各自の動きが良くなっているし、ＤＦラインの問題もなくなっている。着実にチームが強くなっているのを見て取れる。江戸川二中とは大違いだ、なんてことを考えていた。

試合はＰＫ戦にまでもつれた結果桜上水中が勝った。チーム全員で勝利を分かち合っている姿を見てうらやましかった。思い返せば日本に帰ってきて以来、チームみんなで勝利を分かち合った記憶はなかった。
少し離れたところから、眺めていると
「音弥勝ったで」
そう言ってシゲが近づいて来た
「おう。おめでとう。いい試合だった。欲を言えばもっと早くに試合を決めてほしかったけどな」
そう言うと
「しゃあないやないか、雨降ってもうたし。雨の試合やるの始めてやねん。このチーム」
俺は
「まぁ、楽しく試合を見させてもらったよ。」

シゲは
「おう、そんじゃ、またな」
そう言ってチームの中に戻っていた。

３０分ほど時間が経ち、桜上水のチームは帰る準備をしている。
そこど、俺は有希に近づき
「そろそろ、帰ることにするわ」
そう言って別れを告げた。

家に着いてからは、やることがなかった。ピアノの前に向かい指の体操のための譜面を引く。今日の試合を見ていると、気持ちがすごく昂ぶった。いつもならこの気持ちをサッカーにぶつけるのだが今日はあいにくの雨だ。そのため、ピアノにぶつけようと思った。最近はピアノに対する気持ちも落ち着いたものになった。昔はあんなに嫌いだったけど、先生のおかげで今ではピアノが好きになり始めている。今日のピアノは激しいものになりそうだと思いながら、無心に鍵盤を叩いた。

第8話1997年　夏4

最近は何もする気が起きない。サッカー部に別れを告げ、やることがなくなってしまったから。自主練習はしている。しかし、目指す場所を見失ってしまった。何をすればいいのかが分からない。このまま、日々を送ることへの不安を感じる。急に電話がかかってきた。

「サッカーの東京選抜の西園寺というものですけど、上原音弥君いらっしゃいますか」

「私が音弥ですけど。何か御用ですか」

「あら、それなら話は早いわね。今度東京選抜を造るのだけど参加しない」

急な選抜の打診に心が躍った。

「本当ですか。ありがとうございます。喜んで参加させていただきます。」

「ありがとう。そんなに喜んでもらえると誘ったかいがあったわ。今後の日程は、今度送るから、待っててね」

「はい。分かりました」

「うん。それでは、Ｊビレッジで会いましょう」

そう言って電話は切れた。

心臓が高鳴るのが分かる。この路頭に迷う気持ちの目指す場所が定まった。久しぶりに本気で練習をしよう。迷いはなくなった。

送られてきた書類には、今後のスケジュールが書いてある。どうやら、まず初めに選抜のメンバーを決める選考会があるようだ。ここで、俺の実力を見せ付けてやる。気持ちが高まっているのが分かる。選考会にピークを持っていくように調整を行なうことにした。

選考会の日が来た。小岩と同じバスに乗り会場に向かう。道中、

お互いに会話がない。小岩は俺の事が嫌いになったのだろう。急にサッカー部をやめた俺を。他のチームの人間よりだいぶ早く現地に着いた。部屋割りを教えられる。同じ部屋の人は知らない人しかいなかった。別に馴れ合いをするわけではないのだからどうでもいいのだが。

ミーティングルームへ入ると係りの人に声を掛けられた。

「君の名前は」

「上原音弥です」

そう言うと名簿を確認して

「君はBチームになるから、あっちの席に座って」

「分かりました」

そう言って席に向かった。

しばらくすると見知った顔が部屋に入ってきた。しかし、今日は選考会なのだから、全ての人が敵だ。馴れ合う気はない。俺は更なる高みを目指すのだから。

監督が前に立ちはなしをはじめる。

「Bチームは補欠だ」

耳を疑う。こいつは、俺を馬鹿にしているのか。俺が補欠だというこいつの考えが分からない。いらだつ。練習が始まったら見返してやる。そう思いながら、話に耳を傾けた。

今日の午前中は基礎能力の測定を行なうらしい。

初めは50メートル測定だ。みんなそこそこのタイムで走っている。周りがどよめいた。小岩が走ったのだ。相変わらず足だけは速いな。そんなことを考えながら自分の番を待った。小岩にはかなわないが足にはそこそこの自信はある。周りの人間よりは早いという自信が。そう思いながら、スタート位置に着いた。開始の合図を聞く。初めの一歩目で隣のやつを置き去りにした。結果は

「5秒9」

またもや、会場がどよめいた。

次はボールコントロールのテストだ。

こんな簡単なこともできないやつがいるのかと思うとうんざりする。

俺の番が来て無難にこなした。結果は

「１０点」

当たり前だ。トラップして相手にボールを返すだけだ。こんなことぐらいできて当たり前だ。俺なら、何回やっても失敗することがないと言い切れる。それだけの実力は持っている。

的通しのテストだ。

これも、非常に簡単だった。マークのいない状況でのシュートのコントロールなどできて当たり前だ。簡単に全ての的を通し終えると回りからざわめきが聞こえる

「なんであいつがＢなんだ」

「あいつはだれだ」

そんなことが聞こえる。

当たり前だ。お前らとは目指す先が違う。こんなとこではつまずけない。

最後に3対3のテストだ。このテストでは、特別にゴールマウス1つに二人のキーパーが入る。

水野や風祭などのチームがゴールを決め注目を集めている。しばらくして俺の番が来た。チームは俺とＢが一人とＡが一人だった。

相手はＡが二人、Ｂが一人だった。開始の合図がなる。ボールが俺に渡される。これは選考会だ。なるやることは一つだ。

ボールを持った瞬間仕掛ける。マークに来た相手の股にボールを通し抜き去る。残りのＤＦ二人がカバーに来る。あえてスピードダウンしゴールの前にＤＦを立たせるように仕向ける。正面からＤＦ

と向き合う形になった瞬間、つま先を使って、コンパクトなシュートをＤＦの股を狙って打つ。ＤＦがキーパーのブラインドになり、かつつま先でシュートを打つことでタイミングもずらしたこのシュートはネットを揺らした。キーパーがまったく反応できなかった。会場が静まり返る。一人で全てを終わらした俺に注目が集まる。しかし、その視線を無視して俺はその場を後にした。

昼食の時間が来てみんな仲良くなった奴や、元のチームメイトと仲良くご飯を食べる奴など様々だ。俺は一人でご飯を食べていると風祭と水野が話しかけてきた。

「相変わらずすごいね。注目集めてたよ」

「ああ。一番目立ってたな」

「ありがと。これは選考会だろ。なら、注目集めて、実力を見せ付けたもん勝ちだろ」

水野は

「確かにそうだな。ところで、一緒に飯食べないか。あそこに集まっている奴らがお前に興味心身なんだ。」

そう言って指を指す。

視線を指差された方向に向けると手を振る連中がいる。

なるほど。確かにわくわくした顔をしている。

「いいぜ。じゃあ行くか。お前らの席に」

「それじゃあ、自己紹介します。俺、藤代誠二。知らない？結構有名なんだけど」

「残念ながら知らないな。俺が知っているのは風祭と水野、あと小岩くらいだよ。他の人間は誰も知らないよ」

「ええ！ほんとに。」

そう言うと背の高い男が

「少し静かにしろ藤代。騒がしくしてすまないな。俺は渋沢克己だ。武蔵野森中のキャプテンをしている。つまりこいつの先輩だ。

そう言って藤代の頭の上に手を置く。
「それじゃ、次は俺の番か。俺は天城燎一だ。国分二中でＦＷだ。」
「次は俺が言うよ。俺は椎名翼。飛葉中出身で、この隣にいる双子は畑五助と六助だ。んで、こいつは黒川柾輝だ。もちろんこいつらも飛葉中だ」
黒川は
「お前が紹介するのかよ」
そう言ってあきれていた。
椎名が
「最後はお前の番だ」
そう言って俺に話しかけてきた。
「俺は上原音弥。学校は江戸川二中でポジションはＭＦだ。水野や風祭とは練習試合で知り合ったんだ。これでいいか？」
そう言うと
「ねぇ、何でそんなうまいの？あれだけうまければ選抜にも何回か呼ばれてるはずだろ。俺見たことないんだけど。」
そう言って藤代が話しかけてきた。
「すまないな。騒がしくして。でも、俺も気になるな。あれだけうまければ話題になるはずだ。」
渋沢も知りたそうにしている。
「今までは、東京にいなかったからね。技術に関しては、努力したから。ただそれだけだよ。」
「ふ～ん。まぁ、それでいいや」
藤代は興味をなくしたようで話の内容をワールドカップに移した。
俺はワールドカップには興味があるが、日本代表には興味がなかった。日本の実力で世界と戦えるわけがないのだから。
周りが話しに熱中している間にご飯を食べ終え、先に席を立つ。
外に出て芝生の上に立つ。懐かしい。イタリアでは芝生のグラウンドが当たり前だった。今、芝生の上でプレーしたのならあの頃を越えれるだろうか。疑問に思いながら午後の練習を待った。

第8話1997年　夏4（後書き）

更新が遅れてすいません。最近は就職活動が大変であまり多くの時間が取れませんでした。まだ就活が忙しいので頻繁に更新はできませんができるだけ努力しようと思いますのでその辺は許してください。

第9話1997年　夏5

午後の練習は、芝生の上でのパスから始まった。久しぶりの芝生でのプレーだ。そのことを考えると、この基礎練習は今の私にはいいのかもしれない。

「こんなの簡単だぜ」
そんな声が周りから聞こえる。

もう少し、まともなパスが出せるようになってから言えよ。そんなことを考えていた。

しばらくすると、パス練習に飽きたのか、いやな顔をしながら練習を行なっているものが出てきた。実際、私も昔の感覚が戻ってきたので、次の練習に移りたいと思っていたころだ。しかし、これは選考会であってただの練習ではないのだ。練習に飽きてきたことを監督やコーチ陣に見られて悪印象を与えるわけにはいかない。だから、顔には出さずに、もくもくと練習に取り組んだ。

しばらくすると、次の練習に移ることが告げられた。
やっと次の練習へと移れる。そう思いながら、芝のグランドを後にした。

どうやら、ポジションを無視したミニゲーム形式の練習をこれから行なうらしい。
最初はＤＦを任された。ここにいる連中の誰よりも、どのポジションが当たったとしてもうまくやれる自信はある。ＤＦで大切なことは、１対１で抜かれないこと、またゴールを必ず背に向け相手を中に入れないことだ。ＤＦの基本を忠実に守りながら無難にデフェン

スをこなした。その結果、相手に点を取られなかった。
次はＦＷに成った。ＦＷで大切なことは、何よりもってんを取ることだ。他にも相手を引き付けてスペースを造ったりなどの仕事もあるが、これは選考会の一端なのだ。何よりも点を取ることに集中しようと思った。
何点か入れたところで、ゲームは終わった。それから、何ゲームかこなし、他者よりも目立つ結果を残した。

「今日の練習を終わりたいと思います」
練習終了の合図がかかり、みんないっせいに脱力状態となった。その後、各々でクールダウンを行い、各々の時間を過ごすこととなった。

食事の時間となると、風祭が面白いことをしていた。食堂で裸足でボールを蹴りながらご飯を取りに行ってる。飯の時間までボールを蹴るとは。あきれながら見ているとボールの操作をミスり、お盆を思いっきりぶちまけていた。そして、ご飯が真田に掛けられた。

風祭と真田の間で小競り合いが起こる。見ている分は面白いが、正直うるさいので、早々に席を立ち、グラウンドへ向かう。

グラウンドでは、自主練習しているものは誰もいなかった。選抜でさえ誰も自主練習しているものがいないこの環境に驚いた。所詮日本ではこの程度なのかとらくたんしながら、自主練習を続ける。それから、２時間ぐらいしていると、西園寺コーチがやってきた。
「あら、こんな時間まで練習しているの」
「ちょうど、そろそろやめるところですよ」
そう言って、ボールを片付け、クールダウンを始めた。
１５分くらい掛けてクールダウンを終えるまでの間、彼女はずっと見ていた。

そして、クールダウンが終わり
「クールダウンも終わったので、そろそろ部屋に帰りたいと思います」
そう言うと
「それもいいけど、これからちょっと時間ない」
「いいですけど、先にシャワー浴びてきてもいいですか」
「ええ、じゃあシャワーが終わったら私の部屋に来て頂戴」
そう言って宿舎に帰っていった。
宿舎に戻り早々にシャワーを浴びてコーチの部屋へ向かった。
「早かったわね」
「急いできましたから」
そう言って、少し苦笑いしながら答えた。
「それで、あなたを呼んだ理由なんだけどなんだか分かる」
「分かりません」
「そう、じゃあ、言うわね。あなたは、この選抜をどう思う」
「それは、どんな風に言えばいいですか。率直な感想ですか、それともお世辞でも言ったほうがいいんですか」
「率直な意見が聞きたいわね。別にココで言って事は選考に関係させるつもりはないわよ」

「それでは、言わせてもらいます。選抜といっても個々の意識が低すぎると思います。確かに私のいた部活と比べると技術も意識も高いかもしれない。でも、私から言わせてもらうと物足りない。他の連中は何を目指しているのか分からないが、私が目指しているのはワールドクラスのプレーヤーだ。そのためには、努力をしなければいけないと思う。確かに、昼に練習を行なったが、正直、そこまで疲れる内容だったとは思わない。だから、夜に残った体力で自主練習をするのは当たり前だと思うし、やらなければ世界では戦えない。それを考えると、正直周りの連中には腹が立つ。まぁ、ただのやつあたりかもしれないけどね」

「ありがとう。やっぱり、あなたは違う視点でものを考えているのね。だから、他の人たちとは相容れないような行動をしてたわけか。なるほど、目指す場所が違えば行動も違ってくるのも当たり前よね。翼にも、世界を目指しなさいといっているけど、まだ本当に理解しているとは言えないもの。なら、あなたには、この選抜は窮屈かもしれないわね。」

「何かほかに聞きたいことはありますか」

「いいえ、ないわ」

「それでは、失礼します」
そう言って席を立ちドアに向かって歩き出す

「まって、いいこと教えてあげる。もし選抜に残れたら、海外遠征を行なうつもりよ。もちろんそこには海外のスカウトマンがいるわ。後はいわなくても分かるわね」
したり顔で微笑んでいる

「ありがとうございます。それは、いいことを聞きました。それでは失礼します」
そう言って部屋を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3769g/

フィールド上の演奏者

2010年10月10日21時09分発行